

山城と屋形

『薩藩御城下絵図 鹿兒島』は1670年頃に作成され、鹿兒島城の絵図としては最古のもので、鹿兒島湾の桜島上空から、鹿兒島城とその付近を見下ろしている。

中央に、山々に囲まれた平坦地が描かれ、「鹿兒島城」と大きく書かれ、南北660m程、東西550m程と曲輪を示している。大手門を登った右側に建物があり、中央に「武道具屋」建物、周囲に「番所」と書かれた3建物の5棟があり、広さは誇張されているが、実状をもとに描かれたものである。

城山麓の屋形とその周辺は、機械的な格子状の道で囲まれた屋敷地で、中央の区画は、周辺と異なり茶色で広く、右側に19代光久居宅、左側に綱久(光久の子だが家督に就く前に亡くなった)居宅とある。茶色の区画の光久居宅は、堀や橋、御楼門があり、屋形の中枢部であり、周囲は役所や上位の家臣の屋敷地、濃紺の区画は町屋で、格子の区画は直線に囲まれ、道は直角に交差している。現地と比べると、中央は現地の道に対応しているが、周囲では傾いていたりして不規則であるから、当図は、定規で引いた線上に屋敷を機械的に配列したものと思われる。

当図は17世紀前半の鹿兒島城につき、上半分に誇張された曲輪を、下半分に機械的な区画配置で屋形を描いた模式的な絵図である。これにより、当城は築城期から、山城と屋形とから構成されていたことが分かる。